

KISHIDAIA

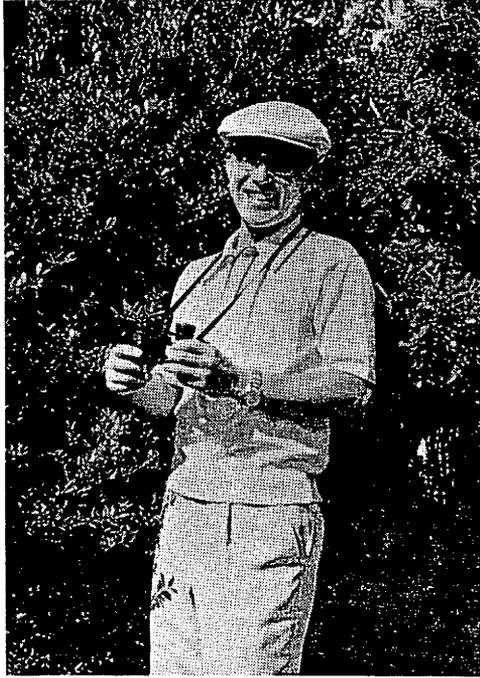
Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No.53 May 1985年

高野伸二先生追悼号

目次

1. 高野先生略歴・活動記録	1
2. 追悼文	
○ 高野伸二先生を偲ぶ	萱嶋 泉..... 5
○ 白いツバメ	中平 清..... 6
○ 高野伸二先生	八木沼 健夫..... 7
○ 高野先生を偲ぶ	佐藤 幸子..... 8
○ 鳥の師・クモの師	高田 勝..... 9
○ 高野先生々々	小澤 実樹..... 10
○ 高野さん永久に	梅林 力..... 11
○ 先生を想うと	松本 誠治..... 12
○ ニシキオニグモとハングロビタキ	浜口 哲一..... 13
○ 高野伸二先生をしのんで 3ヶ月にかけた情熱	新海 栄一..... 14
○ 高野先生とゴマンロオニグモ	池田 博明..... 15
○ 高野さん	熊田 憲一..... 16
○ 「.....」	熊田 理恵..... 17
○ 高野先生の思い出	高橋 登..... 18
○ 高野先生	嶋田 順一..... 19
○ 高野伸二先生の思い出あれこれ	小野 展嗣..... 19
○ 高野先生	松浦 祐司..... 20
3. 一般原稿	
宮城県網地島の真正蜘蛛類	佐々木 勝実..... 22
神奈川県下のスズミグモの記録2例	浜口 哲一..... 26
アンダカグモの長期飼育報告(V)	萱嶋 泉..... 28
ヤマオニグモに見られた網の更新の一例観察	新海 明..... 31
4. 投稿規定	



故 高野伸二氏

高野伸二氏 略 歴

- 1926年7月 東京都四谷生まれ。
- 1944年3月 東京都立第六中学校卒業。
- 1944年4月 満州国立吉林師道大学入学。
- 1945年5月 陸軍入隊。シベリア抑留の後帰国。
- 1947年10月 東京高等師範学校理科三部編入学。
- 1951年4月 東京教育大学理学部生物学科編入学。
- 1958年4月 東京教育大学大学院理学研究科博士課程修了。(財)日本鳥類保護連盟勤務。
- 1960年4月 文部省付属国立自然教育園勤務。
- 1962年4月 (財)日本鳥類保護連盟勤務。日本鳥学会評議員(−1975年3月)。日本鳥学会幹事(−1975年2月)。
- 1967年1月 日本野鳥の会東京支部長(−1976年12月)。
- 1970年11月 (財)日本野鳥の会理事(−1984年10月)。内1978年5月~1984年5月、常務理事)。
- 1972年3月 (財)日本鳥類保護連盟退職。フリー。
- 1973年4月 東京都公害監視委員会委員(1975年4月)。
- 1976年3月 (財)日本鳥類保護連盟理事。
- 1980年4月 (財)日本野鳥の会編集委員長(−1984年3月)。
- 1980年7月 文化庁文化財審議会天然記念物部会委員(−1984年7月)。
- 1983年1月 日本野鳥の会東京支部長(−1984年10月)。
- 1983年4月 東京都自然環境保全審議会委員。



高牟神社にて(1978年11月12日)



滝山城址採集会にて
(1971年5月23日)



東京蜘蛛学会 第12回大会にて(1980年8月23日)

高野伸二先生クモ関係活動記録

(公式行事に参加の分のみ)

- 1958年 東亜蜘蛛学会に入会
- 1969年 東京クモ談話会に入会
1970. 3. 29 東京クモ談話会第49回小例会(東京、八王子市日本私学教育研究所)に参加。
クモ関係の研究会への初参加
1970. 11. 29 東京クモ談話会例会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加。(自己紹介をかねて、「トリとクモ」の話をされる)
1971. 1. 11 「19年ぶりのクモ」をKishidaia, (22):4に掲載(以下報文についてはタイトルと誌名を記す)
1971. 5. 23 東京クモ談話会第1回観察会(東京、八王子市滝山城址)に参加。(奥様も同伴)
1971. 10. 9 東京、八王子市滝山城址にてゲホウグモを採集
1971. 10. 10 東亜蜘蛛学会第3回大会(東京、国立科学博物館)に参加
1971. 11. 26 小観察あれこれ Kishidaia, (26-28):11-13
1972. 3. 26 東京クモ談話会例会・総会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加
1972. 7. 29~31 東京クモ談話会観察会(神奈川、箱根)に参加
1972. 10. 15 東亜蜘蛛学会第4回大会(愛知、名古屋観光会館)に参加
1973. 5. 31 小観察あれこれ(2) Kishidaia, (35):5-6
1973. 7. 15 山梨、富士山五合目にてヤマキレアミグモを多数発見
1973. 10. 10 東京クモ談話会観察会(神奈川、厚木市飯山観音周辺)に参加
1973. 12. 27 クモ類・多足類合同例会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加
1973. 12. 27 小観察あれこれ(3) Kishidaia, (37):4-5
1974. 7. 7 小笠原諸島南島・杣島にてハマゴミグモを採集(日本新記録)
1974. 7. 24 東京、景信山にてソメワケトリノフンダマシを発見
1974. 8. 8 神奈川、厚木市飯山観音にてマメイタイセキグモを発見。飼育、撮影後、同所に放す
1974. 8. 25~26 東亜蜘蛛学会第6回大会(東京、八王子市日本私学教育研究所)に参加
1974. 9. 5 青森、下北半島鷹架にてイソコモリグモを採集(太平洋岸初記録)
1974. 12. 22 クモ・ダニ・多足類合同例会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加。(台湾・小笠原のクモのスライドを映写)
1975. 3. 31 小観察あれこれ(4) Kishidaia, (39):38-39
1975. 4. 29 長崎、対馬・佐護海岸にてカトウツケオグモを採集
1975. 6. 15 東京クモ談話会例会・総会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加。(総会にて

- クモ愛好者の拡大の必要性を強調)
1975. 7. 17 高知県にてデーニッツハエトリがコシロカネグモを襲っているのを観察
1975. 8. 1 長野、上田市にてヒメハナグモを採集
1975. 8. 16~19 東京クモ談話会観察会(山梨、富士山)に参加。富士山五合目にてキタグニオニグモを多数発見
1975. 10. 10 東京クモ談話会観察会(東京、八王子市滝山城址)に参加
1975. 12. 7 クモ・ダニ・多足類合同例会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加。(ナガコガネグモのかくれおびについて講演)
1976. 1. 14 談話会通信(9)に新聞記事を紹介
1976. 2. 29 東京クモ談話会同定会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加
1976. 5. 31 小観察あれこれ(5) Kishidaia, (40):18-20
1976. 6. 13 東京クモ談話会例会・総会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加。(クモのスライドを映写)
1976. 7. 20 学研の図鑑「クモ」(学習研究社)の出版に協力
1976. 8. 2~4 東京クモ談話会観察会(静岡、伊豆半島)に参加
1976. 8. 21~22 東亜蜘蛛学会第8回大会(大阪、なにわ会館、大阪市立自然史博物館)に参加
1976. 9. 15 談話会通信(13)に便り
1976. 10. 10 東京クモ談話会観察会(千葉、松戸市八柱霊園)に参加。(ゲホウグモを発見、採集)
1977. 1. 15 クモと鳥と(1) 野鳥、42(1):9-13
1977. 2. 15 クモと鳥と(2) 野鳥、42(2):73-76
1977. 3. 15 クモと鳥と(3) 野鳥、42(3):124-126
1977. 5. 15 東京クモ談話会観察会(埼玉、日高町巾着田)に参加
1977. 5. 31 小観察あれこれ(6) Kishidaia, (41):3-4
1977. 8. 20~21 東亜蜘蛛学会第9回大会(東京、八王子市日本私学教育研究所)に参加
1977. 10. 9 東京クモ談話会観察会(東京、八王子市八王子城址)に参加。(奥様も同伴)
1977. 12. 31 イソコモリグモとイシカリコモリグモ Kishidaia, (42):43 (新海・熊田氏と共著)
1978. 5. 21 東京クモ談話会観察会(東京、八王子市八王子城址)に参加。(奥様も同伴)
1978. 7. 9 北海道根室市東梅にてカギハグモを採集。(ハグモ科北海道新記録)
1978. 7. 30 東京クモ談話会観察会(埼玉、日高町巾着田)に参加。(奥様も同伴)
1978. 8. 5~7 東京クモ談話会観察会(群馬、妙義山)に参加
1978. 8. 19~20 東亜蜘蛛学会第10回大会(熊本、水前寺共済会館)に参加
1978. 8. 23 白甲鏑先生歓迎会(東京、国分寺市室町)に参加
1978. 10. 8 東京クモ談話会観察会(埼玉、日高町巾着田)に参加
1978. 12. 24 クモ・ダニ・多足類合同例会(東京、目黒区大橋区民会館)に参加

1979. 2. 18 東京クモ談話会観察会（埼玉、日高町巾着田）に参加
 1979. 3. 25 談話会通信（27）に「アサヒタウンズ」掲載のクモの記事を紹介
 1979. 7. 29 東京クモ談話会観察会（神奈川、城山町根古屋城址）に参加
 1979. 8. 25~26 東亜蜘蛛学会第11回大会（愛知、名古屋市王山会館）に参加
 1979. 10. 10 東京クモ談話会観察会（神奈川、城山町根古屋城址）に参加
 1979. 12. 16 クモ・ダニ・多足類合同例会（東京、目黒区大橋区民会館）に参加
 1980. 8. 23~24 東亜蜘蛛学会第12回大会（東京、八王子市日本私学教育研究所）に参加
 1981. 8. 24 萱嶋先生との出会い Kishidaia, (47):24
 1982. 7. 30 東京クモ談話会観察会（静岡、天城湯ヶ島）に参加。（奥様も同伴）
 ~8.1 （夜間観察にて網中のゲホウグモを発見）
 1982. 8. 21~22 東亜蜘蛛学会第14回大会（京都、立命館大学）に参加
 1983. 5. 15 東京クモ談話会観察会（東京、五日市町広徳寺）に参加。（奥様も同伴）
 1983. 8. 27~28 東亜蜘蛛学会第15回大会（大分、別府市翠山荘）に参加
 1983. 10. 16 東京クモ談話会観察会（東京、五日市町広徳寺）に参加。（奥様も同伴）
 1983. 12. 4 クモ類・多足類合同例会・文在根氏送別会（東京、目黒区大橋区民会館）に参加（文在根氏へKishidaia バックナンバーを談話会代表として手渡される。）
 1984. 8. 5 フィールド図鑑「クモ」（東海大学出版会）を著作。（新海氏と共著）

高野伸二先生採集クモ類重要種（活動記録にあるものを除く）

キハダガケジグモ	オダカグモ	ニワオニグモ
コケオニグモ	ニシキオニグモ	キンカタハリオニグモ
ムシバミコガネグモ	サンロウドヨウグモ	キンヨウグモ
ミズグモ	シマササグモ	ホウシグモ
ギョウジャグモ	ヤギヌマノセマルトラフカニグモ	カタオカハエトリ
ネオンハエトリ	ヤバネハエトリ	タイリクアリグモ
ウコンフクログモ	ヨツボシワシグモ	

高野伸二氏主要著書・訳書

〔著書〕

- 野外観察用鳥類図鑑（共著）日本鳥類保護連盟 1965年
- 統野外観察用鳥類図鑑（共著）日本鳥類保護連盟 1966年
- 原色自然の手帖 野鳥 講談社 1967年
- 野生鳥類の保護—愛鳥読本（共著）日本鳥類保護連盟 1971年
- 小学館の学習百科図鑑4 鳥類の図鑑（共編）小学館 1972年
- 日本鳥類目録改訂第5版（日本語版代表委員）学習研究社 1974年
- 野の鳥の四季・高野伸二写真集 小学館 1974年
- 学研中高生図鑑 鳥類（監修）学習研究社 1975年
- 自然観察と生態シリーズ7 日本の野鳥 小学館 1976年
- 野外ハンドブック4 野鳥（編）山と溪谷社 1978年
- 野鳥観察図鑑 朝日ソノラマ 1978年
- 野鳥図鑑（共著）日本鳥類保護連盟 1979年
- 野鳥識別ハンドブック 日本野鳥の会 1980年
- 小学館の学習百科図鑑34 野鳥の観察（監修・共著）小学館 1981年
- カラー写真による日本産鳥類図鑑（監修）東海大学出版 1981年
- A Field Guide to the Birds of Japan（イラスト）日本野鳥の会 1982年
- 野鳥ボックス2 フィールドガイド日本の野鳥 日本野鳥の会 1982年
- 自然観察シリーズ20 バードウォッチング 小学館 1983年
- フィールド図鑑 野鳥小図鑑（共著）東海大学出版会 1984年
- フィールド図鑑 身近な野鳥（共著）東海大学出版会 1984年
- フィールド図鑑 クモ（共著）東海大学出版会 1984年
- 決定版生物大図鑑 鳥類（編集協力）世界文化社 1984年

〔訳書〕

- 鳥の行動 主婦と生活社 1973年。（Spark-s, J. Bird Behaviour. Hamlyn 1970）。
- 猛禽類 主婦と生活社 1973年。（Lloyd, Glenys & Derds of Prey. Hamlyn 1969）。
- すばらしい自然シリーズ1 鳥の世界（監修）ブック・ローン（ハン・レーゼンブリンク Boek BV）。

高野伸二先生を偲ぶ

萱 嶋 泉

高野先生と幽明境を異にしました今日、直接御話の出来ない事をほんとうに残念に思います。先生ほど多くの人に愛せられた方は、いないと思います。特に青年男女に慕われていました。先生は純粋な方であられたので、先生の一挙手一投足が、人の心を打ったのだと思います。私共はまたとない人格者を失ったのです。誠に惜しいことをしました。

日野の自然を守る会での先生の働きは大きいものでありました、自然を守ると言う事が、政治や個人の利益等に利用される事を極力嫌われました。先生の持論は、「自然と言うものは、自然そのままの姿であって、人間がその自然に対してとやかく理屈をつけるものではない」と言うのでありました。先生はいろいろの会合で、はっきりとこの事を話されました。2年前のことですが、日野市において、日野市の鳥をきめようと言う提案が、自然を守る会にありました。高野先生が専長になられて何回が会合が持たれました。市の鳥を定めるのであるから、一般市民から募ることから仕事を始めたいと言う先生の考えで、市の公報を通して募集がはじまりました。市民の関心は高く、いろいろの日野市に關係の深い鳥の名が寄せられました。その鳥の中から専門の高野先生を中心にして選考が行われまして、カワセミが市の鳥ときましたのでした。その時、先生が言われた言葉が、私は忘れられないのであります。先生は「鳥は環境の整っている所を安住の地と選びます。その場所では産卵もしますし、子を育てることもします。現在日野市の浅川に、カワセミの好む生活の場がありますので、カワセミがいついてくれています。しかし人が自分達の都合で、浅川を変えるようなことがありますと、カワセミはすぐさま日野市から姿を消してしまいます。市の鳥としてカワセミを定めた以上、カワセミの好む環境をこわしてはならないと思います」と切々と語りかけられました。私共はこの先生のお心を受けついで、日野市のカワセミを守ろうと、仲間の方と話し合っています。高野先生のお仕事は、日本全体にかかわり合のある大きいものでありましたが、日野市のような小さい都市のことで、全力をつくされました。

日野には、矢島稔先生の主催するインセクトピアと言う、楽しい会があります。この会で話す機会を私に高野先生が与えて下さいました。その夜は高野夫妻、矢島夫妻、金生夫妻の心のこもった料理に舌づつみを打ちながら、私はマライの動物珍談を話しました。このように家族うちそろって趣味の会を持つこのインセクトピアを羨く思ったことはありません。しかし残念なことに、先年金生氏を、昨年高野先生が他界され、この会も淋しさで一杯であります。

高野先生は何時お会いしても晴れやかな顔をされていて、心は何時も温さで充滿されていました。それで私は何時も先生から、ほのぼのとしたものを感じていたのです。返す返すも惜しい人を失ったものです。筆を措くにあって奥様の淋しさを考えると、この東京クモ談話会で、なにが慰めの出来る事がないと思うのであります。先生の墓所が五日市の高德寺ときまった由を承って奥様もさぞ安心なされた事と思います。高野先生これからもどうぞ談話会の会合に御参加下さいますようお願い致します。先生は必ず私共の集まる所には来て下さっている事を私は確信しています。

白　い　ツ　バ　メ

中　平　清

「高野さん」という時、私の心にすぐ浮かぶのは、電線にとまっている1羽のツバメを、写真機でねらっていたゴムの長靴を履いた独特なお姿であります。

それは、かつて拙宅を訪れてくださった高野さんのお供をして、野外に出た日、たまたま、ある谷間に張り渡された電線にとまっていた白いツバメを見つけられ、ニコニコしながらカメラを向けられた時のお姿であります。その高野さんと電線と白いツバメとが、私の心の陰画紙に焼きつけられているのです。白いツバメが高野さんを象徴しているように思えます。

高野さんは「白いツバメは時々見られますよ」と言われたが、私が見たのは現在までにこれ一度きりであります。高野さんのお供をしなかったなら、おそらく一生見ることはできなかつたろうと思います。それですから、よけい強い印象として思い出されるでしょう。

その高野さんが逝去されたことを、東京蜘蛛談話会の通信で知った私は「しまった、！」と叫びました。前途洋々たる鳥類学者、クモの研究仲間を失ったという、激しい後悔に似た思いが突き上げてきたのです。

悔やんでも悔やみきれぬものではありませんが、私はいたずらに悔やみ悲しむことをよします。霊界の存在を確信する私は、高野さんはすでに研究者の村で、お好きな鳥の研究やクモの観察を、再開されておられるであろうと信ずるからであります。私は将来その村を訪れ、またお供をすることができようかと、それを楽しみにしております。

高野さんのこの世でのご活躍と同様、いや、それ以上のご活躍を心よりお祈り致します。

合　掌

噫 高野伸二先生

八木沼 健 夫

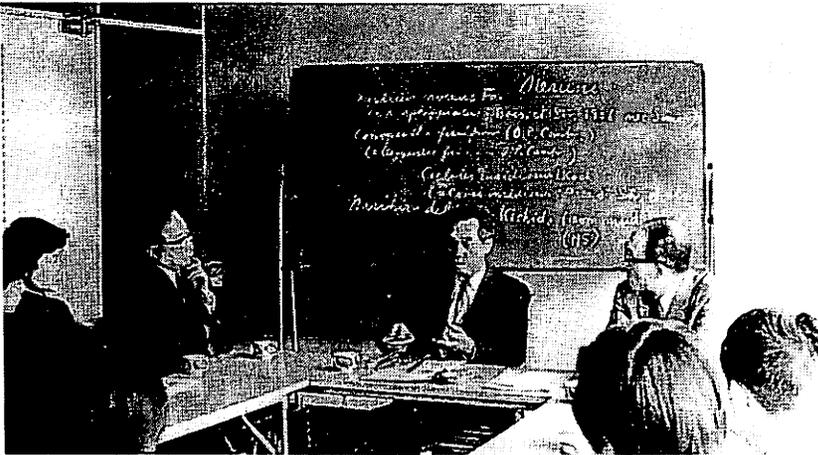
高野伸二先生が東亜蜘蛛学会に入会されるより前から鳥の研究家として有名なことはよく存じ上げていた。鳥の研究のかたわらクモの研究も始められるようになってから、学会の大会はもちろん、東京での種々の会合や採集会に熱心に参加された。野外観察会では自らクモを研究されるとともに鳥について参加者にやさしく親切に指導下さったと聞いている。関西で四宮兄妹がカトウツケオグモを2回発見されたが、そのお母さんが東京で高野先生に鳥やクモの観察会でいろいろ教わったと話しておられた。鳥の学者でクモに関心を持たれる方が多いと聞いているが、鳥とクモとどんなとり合わせがあるのだろうか。

私が初めて高野先生にお会いしたのは昭和45年3月29日(日)、八王子の私学教育研究所で東京蜘蛛談話会が開催された時である。あまりにも有名な先生だったので、私よりは年上だと思い込んでいたのだが、お会いしてみて私より10年下だと知って驚いた。この時は主催者の依頼でクモの学名について講演した。拙い私の話を高野先生は熱心にメモしながら聞いて下さった。出席者はほかに萱嶋先生・新海氏兄弟・松本さん・国見さんが居られた。

高野先生との手紙のやりとりはあまりなかったが、時折すばらしい鳥の写真のポストカードを送って下さった。いつか、ミズグモの産地やカトウツケオグモについて教わったことがあり、またクモの糸を巣の構築に利用する鳥についてお聞きしたこともある。

今度出た東海大出版のフィールド図鑑は、新海氏とともに写真技術が優秀なだけあって感激を以て拝見した。詳細はインセクトリウム1985年1月号に書評として書かせていただいたので、ここには省略するが、あの一文が高野先生への追悼の意をも含めたのである。

若くして他界された高野先生のご業績をしのびつつご冥福を祈る次第である。



この写真は高野先生と同席した私の記念すべきものである。

於：八王子私学教育研究所(昭45.3.29)

高野先生を偲ぶ

佐藤幸子

高野先生は、そこにいらっしやるだけで明るくたのしい空気のただよう、そのようなお方でした。そのおかげで、鳥の世界や写真の世界では素晴らしい活躍をなさっていられた非常にお偉い先生でしたのに、私たちは気がるにお話ぐできました。随分と古い話になりますが、昭和51年8月上旬、東京クモ談話会の合宿が伊豆の石廊崎で行なわれました。その最後の日に天城山でもクモの採集をしたのですが、私は偶然先生のおそば近くに居りました。そして高い木の枝の、葉の裏にオオトリノフンダマンの雌雄がはりついているのをみつけたのです。欲しいノとなったらもう矢もたてもたまりません。『先生ノあのクモを取って下さいノ』と声をはりあげました。しかし背の高かった先生も手がとどかず、困った顔をなさいましたが、そこは人一倍親切でいらした先生のことですから、一生懸命とび上って別の枝をつかみ取り、順々とたぐり寄せて目あてのクモを手に入れて下さいました。そのオオトリノフンダマンが私のクモの観察記録を綴る切っかけとなり、また観察第1号ともなったわけです。

このように、先生はいつも誰にでも御親切でいらっしやいました。ですからどのような事でも気軽に質問ぐできましたし、クモの同定のポイントや重要な問題点など沢山教えて頂きました。まためったに見られない珍しいクモを手に入れられて、それもかならず生きたままの姿で見せて頂いた事など、決して忘れることは出来ません。こんな貴重なクモを、どのようにしたらみつけれられるのだろう等と、よく皆で話しあったものですが、先生は人一倍行動力があり、また努力家であった事はたしかです。

シベリヤ旅行から帰られた時、先生はシベリヤの蚊の話をして下さいました。『シベリヤの蚊はととも鈍くてね。なんかもたもたしていてトロいんですよ。だからトロイカと言うんだって……』こんな話はまだ序の口で、毎年行われる合宿の時など、先生のジョークにみんなで大笑いしたものです。時々奥様も参加なされて、たのしさもダブルになりました。北海道の春国岱で、先生と御一緒にイシカリコモリグモの生息地をしらべたり、その頃はまだ幻であったミズグモを探しあるき、先生の胸にマダニが食い付いてはなれなかったのも、つい近頃のような気がします。嗚呼先生は突然お一人で旅立たれてしまわれました。まだ信じられない気持です。いつもの通り血色の良いお顔をほころばせて、ヒラヒラ手を振って下さるお姿がまだ目の中に焼きついていて、消えません。私の心の中にぽっかりあいた穴の向うで、先生はこうおっしゃるのです。『クモは待っていないからね。今がチャンスなんですよ』と。

高野先生の御冥福をお祈りしつつ筆を止めます。

鳥の師・クモの師

(日本野鳥の会)

高田 勝

あれは、僕が高校2年のときだったから、もう24年も前のことになる。

何月頃のことだったか、もう思い出すことはできない。春の終りだったか秋の初めだったか……あるいは夏休みのことだったか。妙なもので、その日僕は山の中にネズミ色の定期入れを落してきてしまったのだが、その期限が11月23日までだったなんてことだけは、今でもはっきりと覚えている。

僕たち3人……高野さん御夫妻と僕は、その日、城山の裏の方を一日中歩きまわっていた。僕がアサギマダラの食草のキショウを探しているのを知った高野さんが、いい場所を案内してくれるというのである。

当時、僕は高野さんとお付き合いが始まって5年目くらいであったが、すでにいっぱしの弟子気取りだった。それというのも、生物全般に好きな僕にとって、鳥はもちろんのこと、植物昆虫なんでもござれで、いずれにも深い見識をお持ちの高野さんは、まさに神様のような、いやそれ以上の存在であったからだった。

探鳥会の折などにも、大半の人は鳥の姿がないとブーブー言いだすのだが、そんな時でも高野さんは手近な生物に話題を移し、例の巧みな話術でブーイングを消し去るのだった。また、鳥はそちのけで草や虫のことを尋ねる僕を、“うい奴”とでも思って下さったのか、探鳥会の帰途にはよく並んで、いろいろな話をして下さい。

そんな時、僕がアサギマダラの卵を友人から入手したものの、食草確保に困っていると知って、早速連れて行って下さったのだった。

その山歩きは、最初から楽しいことだらけだった。途中の雑木林でササバギンランを見つけ(ということは、春だったのか)、アブラギリの木を初めて教わり、それがオオキンカメムシの食草であることも教わった。スズバチやキオビベッコウなどの蜂の話が続き、その時初めて、クモの世界の話も伺った。

キショランはもちろん採集できたし、その日の経験は、僕と高野さんとのその後の長い(しかし今となってはあまりに短い)お付き合いのスタイルとして定着したのだった。

つまり、僕たちだけで歩いている時は、鳥の存在は薄れるのである。いや、薄れるのではない。お互い、上空をよぎる影や、枝先をかすめる羽音には敏感に反応する。目でうなづきあいもする。しかし、話題は鳥以外であることが圧倒的に多かった。

クモの話が、高野さんの口からとくに多くでるようになったのは、昭和45年、僕が結婚した頃からで、当然のことながら僕のクモ熱も高まり、百合ヶ丘の新居のまわりの雑木林に、新妻(当時)とつかれたようにクモの姿を求めて歩いたものだった。

結婚した翌年だったと思う。僕ら夫婦と高野さんの3人で、大磯の駅のそばのナントカ山にクモ

を見に行った時だった。山道の途中で、土の崖に顔を近づけ、いっしょうけんめいカネコトタテの住居を探している高野さんのすぐ後に立っていたカミさんがポツリと、「高野さんの首って、切りやすそうね」と言った。思わず首をすくめ、「いやだな、恐いな」と笑った高野さんは、それ以来根室にくと、首をちぢめて「そう簡単には切られんぞ」と目をむいたものだった。

館山に、高尾に、多摩丘陵に、そしてここ北海道は霧多布湿原にと、考えてみればクモだけを目的として同行した旅もずいぶんと回を重ねていた。一向に名前のおぼえられない僕にあきれもされたろうに、しかしクモの話の出ないことはなかった。

今となっては、学研の『クモ』の表紙を飾るイオウイロハシリグモ……あの撮影の時照明係を務めたことが唯一お役に立ったことではあった。そして、アカスジコマチグモが、僕と高野さんとの最後の話題であった。

~~~~~      ~~~~~      ~~~~~

## 高野先々生々々 ………

小 沢 実 樹

人が逝く。その時、訳もなく身体がふるえ、怒濤のように涙が流れることがある。やがて、その大粒の涙や汗が乾く頃になると、その涙や汗はなんだろうか、その人から貰った考え方や行動が、自分にとってどんなものだったのか。そんなことを自然に分析しはじめている。



月日が過つにつれ、その人の言葉や、残してくれた温い視線がますます輝いて自分の脳裏によみがえってくる。時間の感覚もなくなり、よりリアルにその人と自分とが、心の中で大きな声を出して話し合い、ますます対話のはづみはじめる。



生意気と思いながらも、高野伸二先生との対話がいよいよ深くなってきた昨今である。遠く「カーン、カーン」と聞えた鳥の声に、「コノハズクだ」と教えていただいた深夜の妙義山。生きているカトウツケオグモを見せていただいたあの日。忍野村の草むらで夢中にカメラをのぞく姿。京都の喫茶店で、店に飾られた鳥の絵をみて、マスターにたづねたそのことば。アイドル歌手をマネて歌った先生の様。そして談話会では、いつも身体いっぱいリーダーシップを感じさせた先生。私にとって、先生との対話はこれからはじまる。今、あらためて感謝の気持がわいてくる。でも、できるなら、やっぱり先生にもう一度お目にかかりたい。 合掌 （1985年1月）

## 高野さん永久に

梅 林 力

私が高野さんを特に印象づけられたのは、東京クモ談話会の八柱霊園での採集会の日でした。それまでに、もちろん高野さんの事はぞんじあげていたのですが、鳥の権威の方だという程度で、個人的にもあまり話しをしたこともなかったからです。

採集会の日、天気もよく気分の良い日であった。私達一行は、集合場所に集まるともうみんなきょろきょろと始めていました。いろいろなクモを採集しては、皆でクモを見ながらいろいろと話しあっていました。わりに平凡なクモばかりで、皆の盛り上りもいま一步でした。松の木の間の道を歩いているときのことで。後ろの方で、「ゲホウグモがいたぞ!!」という声に、今来た道を走って戻りました。松の小枝の先に、松の枝の折れたような形でしがみついているゲホウグモがいました。私は、この時初めてゲホウグモの実物を見ました。発見者は、高野さんでした。ここにいると言われてもわからないようなクモ、しかも高い所にじっとしているものを良くみつけたものだと高野さんの観察眼に感心しました。その後、松の枝を見るたびに私はその事を思い出して注目するのですが……どうも高野さんにはかなわないのです。

それからしばらくして、私の目の前に1びきの虫が飛んできました。飛び方がおかしいので良く見ると蜂が何かくわえて飛んでいるのです。私はとっさに、捕虫網で捕えました。蜂のくわえていたものをすでに離していましたが、それは、8本の脚をきれいにもぎとられたクモでした。高野さんは、それを見ると間髪を入れず、「オオモンクロベッコウ蜂だな」とおっしゃいました。そしてさらに「クモの脚を全部噛み切って運ぶのはオオモンクロベッコウ蜂だから」と言葉を続けました。その時は、良くみつけたなとか、眼が良いなとか、注意力がいいな、蜂のことにもくわしいなぐらいにしか思っていませんでした。しかし、高野さんはそんな表面的な程度の人ではなかったのです。その後、高野さんと接していると、高野さんの姿がもっとはっきりわかってきました。高野さんは、実に生き物に関する知識が豊富で、生態にもくわしい方でした。だから、どんな環境のどんなところに、どういうクモやムシ、もちろん鳥がいるのかよくわかっているから見つけられたのです。ただ、ちょっと知っているなどというものではなかったのです。だから高野さんは、クモの仲間もなかなかみつけれないような珍種を、採集の折に次々と見つけられたのです。それは、高熱さんのばば広い知識が根底にあったからなのです。

採集会には、いつも長靴姿で、備えあれば憂いなしの高野さんでした。誰にもやさしく、誰にもわかりやすく、誰にも親切に接して下さった高野さんにもうおあいできないことは、本当に淋しく悲しい事です。高野さんには、もっともっといろいろな話をお聞きしたかった。これからも良い指導者でいてほしかった。今さらながら高野さんの存在を大きく思わずにはいられません。

高野さん、いつまでも私たちの会を見守っててください。私たちも高野さんに負けないようにがんばります。高野さん、安らかに眠ってください。

# 先生を想うと

松本誠治

今、僕の目の前に“A Field Guide to the Birds of Japan: text by wild Bird Society of Japan, illustrations by Shinji Takano”がある。1983年10月12日、高野先生のお宅にお邪魔した時にいただいたものである。先生は、見返しに日付と署名を入れて下さった。それから1年、先生は逝ってしまわれた。

頭に浮ぶのは、滝山城跡での鳥の話、北海道で望遠鏡越しに見せてもらったノゴマ、キジの学名について、傷をしたムクドリを手に入れた時にした電話、ニワトリのClutch sizeのこと、ヨダシハエトリのCourtshipのスライド、談話会の例会での話、アサヒハエトリのことでかかってきた電話、四国でのあれこれ、電線にとまっていた白ツバメ、植村先生古稀記念の監査、奥様も一緒に囲んだ麻雀卓、富士山で見つけたキタグニオニグモ、熊田さんの結婚披露宴、家族そろっての訪問、そして、昨年3月10日東芝中央病院での元気なお姿、等々である。もう親しくお付き合いできなくなってしまったことが残念でならない。

「フィールド・ガイド」のページを繰ると、野外での見分け方の指針が4ページにわたってあり、親切な内容であることがわかる。中でも、科ごとに世界中の種数と日本でみられる種類数が掲げられていることや、図に加えられた区別点を示す矢印など、図鑑には是非必要であると思っていたことが書かれている。先生からいただいた時にも、これらの点に驚き、感心し、羨ましく思ったことを思い出す。ページを繰りながら、この鳥は、その鳥はと、あれこれ教えて下さった先生が、そして、脚を描くのがいやで描かないでいたら脚だけ残ってしまい困ったと笑っておられた先生が、いまはもういないことがかなしい。

いつのことだったか、「貧乏くじをひいてばかりいるようで腹立たしい」と愚痴をこぼしたことがある。この時、先生は「それは近視眼的考えで、必ず報われるものだ。若いのだから頼まれたことは、ことわらずにした方がいい。多種多様な経験が人間を成長させる。何か得をしようと思っただけするのは、すぐに底がわれる」というような内容の話をして下さった。先生の口から出た言葉には説得力があった。以来、頼まれた仕事にも、そのための忙がしきにも、意外とおおらかでいられるようになった。こうした先生の考え方や生き方に、一種のあこがれを感じるし、先生と出逢えたことに喜びを感じる。

高野先生のことを想うと、あらゆる感情が立ち現われる。先生との別れが30年も40年も早かったことが、さみしく、くやしい。

(1985年1月15日)

(〒187 小平市学園東町387番地の21)

## ニシキオニグモとハシグロビタキ

浜 口 哲 一

高野さんは、僕にとって近いような遠いような不思議な存在だった。随分多くのことを教えてもらったのに、一緒にフィールドを歩いた機会と言えば、両手の指に足りないくらいしかない。年賀状を出しても暑中見舞を出しても音沙汰がなく、嫌われてしまったのではないかと、本気で思い悩んだこともあった。それだけ高野さんの人となりを知らなかったと言うべきだろうか。その遠かった分だけ、亡くなられたことが今もって信じ難い。何か、聞きたいことがあれば、すぐに電話をかけて教えてもらえそうな、そんな存在として、高野さんはずっと僕の心の中で生きていてくれるだろう。

高野さんに親しく話をしていただけるようになったのは、日本鳥類保護連盟の「私たちの自然」の編集の手伝いをさせていただくようになってからだった。今、思えば、僕のクモへの興味も、乏しい知識のほとんども、その編集会議の席で、写真を手にした高野さんの話から得たような気がする。カトウツケオグモの模様は多分鳥の糞への擬態で、アゲハチョウの若令幼虫やオジロアシナガゾウムシと同じであること、トリノフンダマシの粗い網に蟻がよくかかるのは誘引物質があるからではないか、など心に残った話は数多い。

たった一度、編集委員で1泊の研修旅行へ行っていたことがあった。千葉県館山市に泊り、県が作っていた鳥獣保護センターの見学をした。その帰り道、バスを待っている時に、近く空地で、高野さんがさかんに手招きをされている。行ってみると、生け垣に円い網がはられており、地味なまだら模様をしたオニグモが、かくれ家から出てきたのか、のっそりのっそりと動き回っていた。腹の方を見てごらんと言われて、のぞきこむと、黄色と赤の斑紋が、背面の色とは似つかわしくないほどの鮮かさで目に飛びこんできた。これはニシキオニグモといって、好きなクモの一つなんだ、高野さんがニコニコ話されていた姿が、今も脳裏に浮かんでくる。夢の島にハシグロビタキが来ているというので東京へ戻る途中寄り道をする事になった。埋立地の岸壁の方へ歩いていくと、双眼鏡を下げた人が向こうからやってくる。出ましたか？それが残念ながら、とお決まりの会話かわされたが、高野さんは、いるでしょうとこともなげに言って、どんどん歩いて行かれる。あわてて後を追うと、尾羽の白黒模様の目立つ小鳥がくさむらを越えて飛んできて、パッと、道ばたにとまった。ほら、いた、まるで鳥を呼ぶ不思議な力を持っているような高野さんだった。

生涯、もっとも純粋な意味でナチュラルリストであり続けた高野さんの道を、僕も歩いていけたらなあと思う。

## 高野伸二先生をしのんで —— 3ヶ月にかけた情熱 ——

新 海 栄 一

昨年(昭和33年)の4月18日、胃の手術のため東芝中央病院に入院されていた高野先生が退院なされる日、私が車でお迎えに伺った折、先生はたいへんうれしそうに同室の患者さんや看護婦さんに笑顔で挨拶してまわっておられました。帰りの車の中でも早速『いつから山に行こうか?』と採集の予定を立てたり、フィールド図鑑の原稿のこと(ハエトリグモ科、カニグモ科、トリノフンダマン類他、先生の好きなクモの所は執筆されることになっていた)等、クモの話ばかりしておられました。

退院後の先生は、まだ写真の無いクモの採集と写真撮影に全力をかけられ、退院後2日目には付近の林にスネグロオチバヒメグモを見つけた、5日目には浅川の河原まで進出し、1週間目には早くも八王子市の杏林大学付近にイタチグモを、さらに5月1日には裏高尾の日影沢、小下沢にタニマノドヨウグモ、マルヅメオニグモをめざして出かけております。その後も、雨の日は家で撮影、晴れた日は外に出るといような生活で、私の所にいただいている標本の採集記録を見ても、ネオンハエトリ(5月14日・日野)、ヒメアシナガグモ(5月15日・豊田)、チビホラヒメグモ(5月21日・豊田)、ムネグロサラグモ(5月23日・五日市)等、今となって考えますと、もう時間があまり無いことを感じておられたような精力的な活動ぶりでした。

6月13~14日にはシマミヤグモを探しに真鶴、熱海方面に奥様と3人で出かけました。この日は雨で海はかなり荒れて波も高かったのですが、先生は波打ちぎわまで行かれて岩の間に潜むシマミヤグモの採集に成功しました。この時、何となく不安な気がして先生と奥様の後姿にシャッターをきりましたが、残念ながらこれが最後の写真になってしまいました。

7月に入って再び体調が悪化してからも野外に出かけられ、再入院される前日の7月15日にも(その2日前にも同所に行っています)タクシーで五日市の広徳寺に向われました。そこで念願のクモ(ムツトゲイセキグモ、ツジマトリノフンダマン、サカグチトリノフンダマン)の一種であったムツトゲイセキグモを奥様の協力で採集されました。東京では昭和2年以來57年ぶりの発見になります。最後の採集でのムツトゲイセキグモの発見は、15年間にわたってクモの観察に情熱をかたむけられた高野先生にふさわしい劇的な幕切れと言えるのではないのでしょうか。

私はこの一年間、高野先生に接する機会が最も多かったことを幸せに思っております。先生が私に見せて下さった再入院までの3ヶ月間、それは限りある命をかけて採集・観察とは、研究とはこのようにやるのだと教えて下さっているようでした。そしてまた、一つの分野を発展させるためにはこのくらい情熱をかけて努力しなくては、と言いたいようでした。野鳥観察の分野で現在の隆盛を築きあげられた高野先生が、クモの研究者に対して示した無言の圧力を感じさせられました。

今、私は先生がめざしておられました夢、フィールド図鑑の次に考えておられた目標、その実現のために努力して行きたいと思っております。そしていつか「クモの野外識別図鑑」を完成させたいと願っております。

どうかいつまでも蜘蛛も鳥も、そしてそれぞれの研究者の活躍を見て下さい。

## 高野先生とゴマジロオニグモ

池田博明

それはゴマジロオニグモの網だった。1983年8月29日、宮崎県の上祝川（かみほうり）でのことである。萱嶋泉、新海栄一、高野伸二の一行に同行させていただいた僕もカメラ片手にクモの写真を撮っていたのである。私たちを案内して下さったのは、築地満男、石野田辰夫、松山紘一の九州のクモ研究のベテランの方々だった。ゴマジロオニグモは普段は葉を巻いた住居の中に潜んでいて、網の中心には出てきてくれないのである。高野先生が葉をのぞきこんだ。「いるいる、アリをかけてみよう」。そこで、僕と先生はアリを探した。ポイッと投げると、うまく網にかかった。その瞬間、ゴマジロオニグモがさっと網の真中に出てきたのである。やった！クモはアリの方を向くと脱兎の如く駆け寄り、アリに糸をかけ始めた。高野先生のカメラのストロボがバシッバシッと光る。そのうちにクモはまた自分の住居に引っ込んでしまう。「出てきましたね」「うん、しかし、真中に出てきたところがうまく撮れなかったな。もう一匹アリをかけてみよう」。そこで今度は私の持っていたアリをかけた。クモは又も飛び出した。高野先生のストロボが光る。クモが真中に留まるのは一瞬だ。すぐにアリの方向を確かめ、動いてしまう。「撮れましたね」「うん、でも、もう一度やってみよう」。再びアリを探して、網にかける先生。クモもよく出てきてくれる。「今度は撮れたでしょう」「うん。もう一枚撮ろうかな」。またですか！再びアリを探す。網にかける。見ていた僕の方が先にまいてしまった。ゴマジロオニグモは高野先生に任してとばかりに、先に進む。また別の所にも網があった。だいぶ経ってから先生が歩いて来られた。「うまく撮れましたか」「うん、どうかなあ。撮れたと思うけれどね」。僕はこの答えを聞いて、感動してしまった。先生ほどの写真の腕を持った方だからこそなのだろう。一枚の写真を撮るときの根気強さと、謙虚さを感じってしまった。先生の自然に対する謙虚さは「自然に学ぶ」姿勢から育まれたものであろう。僕は食事どきに先生がして下さった蜂の話をお忘れな。東海大出版会『クモ』のゴマジロオニグモを見るたびに、楽しそうに生き物の話をしておられた先生を思い出す。先生のように生き物を語れる人間になりたいと今でも僕は思っている。

## 高野さん

熊田 憲一

高野さんの再入院を知ってから、1ヶ月あまりで高野さんは帰らぬ人となってしまいました。いつも鳥やクモを追って日本中を元気に飛び回り、病気知らずだったあの高野さんが……と今でも信じられません。そろそろ鳥の仕事を辞めて、好きなクモなどしながらこれからを過したい、と準備されていた矢先のこと、私も高野さんの活躍を楽しみにしていただけに、残念でなりません。

高野さんと初めてお会いしたのは、私が最初に談話会の採集会に参加した1971年5月23日の滝山城跡でした。まだクモのことなど何も知らないかけ出しの私に「クモはとても楽しいよ」と声をかけていただきました。この言葉と、昼食の時皆に聞かせてくれた鳥の鳴き声の口笛とが一つになって、高野さんとの出会いはとても印象深いものになっています。その言葉の通り、クモは本当に楽しいものでした。

それ以来、高野さんとはクモを通じていろいろな思い出があります。私がイソウロウグモを集めているのを知った時、横浜でアカイソウロウグモを見た。と場所を教えてくださいました。さっそく出かけたものの、見つけれずに落胆して帰ってくると、それなら、とお忙しい中出向いてくださり、見事北根のアカイソウロウグモを採ることができました。この時高野さんのトレードマークにもなっている長グツの威力と魅力を知りました。長グツをダンディに履く姿にあこがれヒザまである長グツを探したのですが、とうとう見つけれずじまいでした。この長グツが北海道など雪深いところのみで売っているのを知ったのはつい最近のことです。

結婚する前からよく2人でお宅に押しかけ、お話を聞かせていただいたり麻雀を教えてもらって楽しませていただいたものです。その中にこんな話がありました。高野さんがコガネグモを採ってきて庭に放したところ、居ついて立派な網を張り、喜んでながめていたが、ある時ながめている目の前で飛んできたヒヨドリにアッという間に持ってゆかれてしまったそうです。怒っていやら悲しいやらで困った。とおっしゃっていました。高野さんはクモの中でもコガネグモ類がお好きで、その中でも大きくて立派なコガネグモが特にお好きだったようです。その大好きなクモを、やはり好きな鳥にさも大ぶりの卵ドウフのようなパイを使って家庭麻雀を楽しませていただきました。さらに、結婚の時に仲人を引き受けていただき、私の新たな人生を祝っていただいたことなど、思い出が絶えません。

春の退院後、早く回復されるように、そしてまた一緒に麻雀を楽しみたい。とばかり思っていたが、誠に残念でなりません。見舞に行った折、病床でクモの話をする時横にいる奥様に「ぼくの本を取って」と言って、できたばかりのポケット図鑑をめくってはクモの写真を見ている姿がとても印象的でした。高野さんがフィールドにしていた多摩川小宮河原の上を八高線乗務で通過する時、今でも土手から長グツとハンティング姿の高野さんが、双眼鏡でこちらを見ているような気がします。

高野さんの御冥福をお祈りし、高野さんの御遺志を大切にこれからもクモと接してゆくつもりです。

「……………」

熊田理恵

先生が亡くなられてから3ヶ月になります。けれど私には昨年秋の出来事が、遠い別の事のように思えてしまい、今だに信じられないのです。電話では“高野です”という先生の元気なお声が、今も聞こえてきそうな気がしますし、採集会ではまた先生の笑顔にお会いできるような気がしてなりません。追悼号の通知をいただきましてからも、現実を認めたくない気持もあって筆は重く進みませんでした。もたもたと毎日思い出や出会いをたどっていますうちに、気持ちをお伝えできればと思うようになりました。今までの思いが先生のもとに届きますことを願いつつお手紙申し上げます。

先生どうしていらっしゃるですか。“下界は相変わらずにぎやかだな。”と笑っていらっしゃるのではないのでしょうか。先生を初めて気憶の中で意識したのは、三合同例会の時だったと思います。その時先生は、“クモ始め宣言”をなさいましたね。その時分私もクモに興味を持ち初めていたのですが、皆さんの前で構えて宣言された先生のお心が、良く分からず不思議な心持ちで聞いておりました。後日、先生を取り巻くさまざまな方に接する機会を得ました時に、それがどんなに先生にとって大切な事であったかを知りました。先生は、クモの楽しみや、さあクモを始められるといった嬉しさを皆さんにお話ししてらしたのですね。皆さんと同様に、私も先生から教えていただいた事が沢山あります。それはうまく表現できませんが、先生の心の姿勢のようなものです。置き換えられる言葉があるとすれば、“全ての物事に対するやさしい心と生きる楽しさ・エネルギーを持ち続けてらした”といった表現になるのでしょうか。先生と巡り会って10年そこそこですのに、心の中に大きく存在しています。私にもそんな生き方ができたらと思いつつ、現実押し流されてしまう事がずいぶんあります。ある方が“先生は一生少年だったような気がします”と話しておられました。お笑いになりますか。私もしかめつらした親としての顔をする時がこのごろあります。そんな顔をしながらも“ほんとうは、違うのではないか。”と迷っています。子や自然の中にもっと身を委ねて生きてても良いのかもしれない。人・クモそして野鳥を見る目は常に穏やかでいられた思い出ばかり浮んでまいります。

先生にご沙汰してしましましてから、我家もだいぶにぎやかになりました。先生のお言葉で、印象に残っている言葉があります。覚えていらっしゃいますか。“今まで別々に生きてきた2人も今日からは、人生という海に向い、一舟の家庭という船を出発させねばなりません。船には船長もいれば、機関長もいます。次第に乗り組員も増えることでしょう。その時何もセンチョウ、言う事をキカンチョウであってはならないのです……。”先生、奥様を見るたびにこの言葉を噛しめておりました。先生、今年はどうやら3人目の乗り組員が仲間入りしそうです。まだまだあぶなっかしい熊田丸ですけど、皆して協力して生きてゆこうと思っております。そして私も少々欲ばって、先生が観ていらしたクモの世界に、いつかふれてみようかとも思っています。

とりとめのない事を書きつらねてしまいました。でもなぜか、笑顔の先生が目には浮かんでまいり

ます。淋しいですが、どうぞ安らかにお眠り下さい。

かしこ

昭和60年1月17日

熊田理恵

高野伸二先生へ

追伸 追伸の無礼をお許し下さい。先生、どこにいらしても奥様のお声は、お聞き下さいますよう心からお願い申し上げます。

.....

## 高野先生の思い出

高橋 登

私が高野先生と初めてお会いしたのは、昭和45年11月の東京蜘蛛談話会第一回例会の時でした。先生の御名前は、鳥の図鑑や自然関係の雑誌などでよく知っていましたので、こんな有名な先生が参加されている会にはたして私のような高校生が入ってしまっているのだろうかと思っていました。それから約15年間、談話会の合宿、採集会などでご一緒し、先生はよほどのことのない限り談話会を欠席されることがなかったのでいろいろとおもしろい話をうかがうことができました。高野先生の興味の対象は、鳥や蜘蛛だけでなく、昆虫や植物に対してもむけられていました。採集会の時など、不明の寄生蜂の名前を私が先生にたずねると、先生は種名だけでなく、その種の特徴や参考文献までくわしくおしえていただいたことがあります。またその場で名前がわからず、私があとでしらべてみますと言っておった蜂の不明種なども先生はよくおぼえていらっしゃる、つぎに会った時、『ある時の蜂の名前は、わかりましたか？わかりましたら手紙でもおしえてください』と言われたこともありました。また先生はよく『最近、鳥よりも蜘蛛の方がおもしろくなってきた野鳥の会に出席しても蜘蛛の話ばかりしている』と口ぐせのように言われ、そして鳥の写真と蜘蛛の写真とでは蜘蛛の写真の方がむずかしいとも言われていました。談話会の例会などで見せていただいた先生のクモのスライドはシャープで美しく蜘蛛の生態が非常によくとらえられていました。先生の蜘蛛を見る目はその写真に一番よく表われていたように思われます。自然をこよなく愛した先生の情熱は、そのまま写真に表われていました。東海大学出版会のフィールド図鑑「クモ」は、先生にとって最後の著書になってしまいました。先生は、この本を完全なものにするため病身をおして写真をとりに野外へ出かけていったとうかがいました。先生は昼夜休む暇なく、絶えず強固な意志でもって仕事をしておられたようです。いまこの本を手にとって見ると先生の血のにじむような努力の積み重ねと、クモに対する情熱の大きさがつたわってきます。本が完成した時に先生に撮影の苦心談など聞きたいと思っていましたが、それも出来なくなってしまいました。

先生のような美しく魅力のある蜘蛛の写真をとる方は、今後到底生まれて来そうもない気がいたします。

# 高野先生

嶋田 順一

私が談話会に入会したのは昭和48年で約12年余りたちます。高野先生とはじめてお会いしたのは翌年の学会の時だったと思います。しばらくは、先生に対して、クモの専門家であるのに、鳥についてずいぶん詳しい人だなどの印象をもっておりました。あとで多くの人から「実は高野先生は……」との話を聞くにおよんで、たいへん驚ろいた記憶があります。先生の行動を見ていると、精力的で、何にでも興味を示し、たいへんに若さを感じておりました。親子程の年齢差のある私どもに対しても、たいへん丁寧に、そして親切に接してくれました。採集会などに、先生がおられると、何故かほっといたしました。もう、お会いすることが出来ず、素晴らしい観察力、豊富な知識に接することができないと思うと、たいへん残念でしかたがありません。先生のご冥福をお祈り申しあげます。

~~~~~

高野伸二先生の思い出あれこれ

小野 展嗣

小観察あれこれの名で高野先生はこのKishidaia 誌上に数回にわたって珠玉の観察記を発表された。今読みかえしてみると在りし日の先生の姿が彷彿としてくる。その(5)に対馬で先生がみつけられたカトウツケオグモの♀の採集、飼育記録が載っている。先生はこの貴重なクモの標本を「写真は撮ったので標本はさし上げます。」と言って私に下さったが、これも今は遺品のひとつとなってしまった。私は今までにこのクモの標本を4頭しか見たことがない。サカグチやツツマトリノフンダマシと比べても遜色のないカニグモ類中随一の珍品である。♂はまだ知られていない。先生がこのクモを飼育されていたときのこと、ある時、電車の中に迷い込んだ太ったクロバエが一匹ブンブンと窓にあたるのを見て高野先生御夫妻が思わず「あら、おいしそうなハエだわ、カトウさんに食べさせたら喜ぶでしょう。」などと話していると、それをきいた電車の乗客の視線が一せいに御夫妻に向けられたというのは有名なエピソードである。このクモのカラー写真は新海栄一さんと共著のフィールド図鑑の135頁に載っている。この本は先生の日本クモ学界への遺産である。

何年も前のあるクモ学会大会の懇親会の席上、クジを引いた順に何か余興をやるということになった。運悪くいきなりバトンをひろってしまった無名の私はとっさに高野先生と松本誠治さんに助けを求めた。そのとき先生は待ってましたとばかり、たしか天地真理の歌を身振りつきで歌って皆の大喝采を浴びた。当時はまだカラオケも今ほどは流行していなかったと思う。

「石を投げて鳥の群が飛び立つところを撮影するけしからん奴がいる。そういう奴の写真を見る

と不自然なのがすぐわかるんだ。」先生は意外に人見知りだったのかよく「ぼくはこういう人はきらい」とズバズバ言われた。先生にきらわれる人はきまって自然を何らかの形で自分のために利用しようとしている人たちだったように思われる。先生のお話はいつもユーモアがあって面白かった。その面白さはやはり鋭い観察眼と自然に真正面から対峙する真摯な態度に裏打ちされていたと思う。

私は図鑑の仕事や東京クモ談話会の観察会でいく度か先生とご一緒できたことをうれしく思う。その後7年間ドイツに行っている間すっかりご無沙汰してしまい、帰ってきたとたんに先生はなくなれてしまった。本当に残念でならない。私が先生から得た最大のサジェッションは、十把一からげの有象無象にならないよういつも自分の個性を大切にしなければならぬということであったと思う。その有象無象の側からみるとうらやましくさえ思えるのは、自由なナチュラルリストとして、また鳥やクモの生態写真のバイオニアとして燃えつきた先生の充実した後半生なのではないだろうか。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



高野先生

松浦祐司

高野先生との出会いは、'75年8月16日、まだ会員でなかった私は、友人の蓮沼君と一緒に会員である高橋さんにつれられ、談話会の富士合宿に参加した時であった。

談話会入会以前より野鳥の大先生ということで、高野先生のお名前だけは聞き及んでおり、また高橋さんより高野先生が「談話会には、有象無象な人間はいらない」とおっしゃっていると聞き、たいへん緊張して合宿の宿である富士屋旅館へ向ったことを覚えている。しかし、お会いしてみても「随分とやさしそうな人だな」というのが私の率直な印象でした。

その合宿で、忍野村ハリモミ純林周辺での採集時、先生が突然「ハイタカがカラスに追われている」とおっしゃってはるか上空を見あげておりましたが、私にはどれがどれなのかさっぱりわからずさすが野鳥の先生だと感心させられました。また、先生の母校である教育大の山中湖山荘のカラマツ林へ移動した時、先生はたいへんうれしそうな表情をなさりながら「私は、この木のここでコケオニグモを採集しました」と直径50cmぐらいのカラマツの胸ぐらいの高さを指していたのを良く記憶しています。

採集会では、いつもハッセルブラッドを無造作にリックの中につつまれ、トレードマークのハンチングに長靴姿で、良く奥様と同伴で参加なされいつも後ろの方をゆっくりと歩いておられ、私の目からは、自然の中に溶け込んでクモとの対話を楽しみに来ている様に見うけられました。

先生のお宅へ談話会員の方々とおじゃまして、すばらしい象牙のバイで遊んだ麻雀、その時みせ

ていただいた鳥の写真、オオジョロウグモの網にかかったツバメの写真を同定していただいたことなど、まだまだあるのですが、あまりに日常的すぎて思い出せませんが、先生がよくおっしゃっていた「有象無象な人間にはならないように」という言葉を忘れることはないと思います。

高野先生との別れがあまりに早すぎた。これからもいろいろとおつき合いをさせていただきたかったが、残念でならない。

宮城県網地島の真正蜘蛛類

佐々木 勝 実

宮城県牡鹿町網地島は、北緯 $38^{\circ}15'43''$ 東経 $141^{\circ}28'58''$ の海上にあり、北に牡鹿半島、東に金華山、北西に田代島を望み南方に広大な太平洋を眺めることができる、南北におよそ5.5 km東西に1.5 km、総面積6.58 km² の南北に長い島である。

島の南北の両はじに長渡と網地という部落がある。中央部は高台となっており、そこに小中学校がある。水田は長渡に多く、網地にはわずかに見られるだけである。中央部の高台はほとんどアカマツ、クロマツの松林であるが網地より、タブ林やクヌギ、コナラの雑木林が見られる。

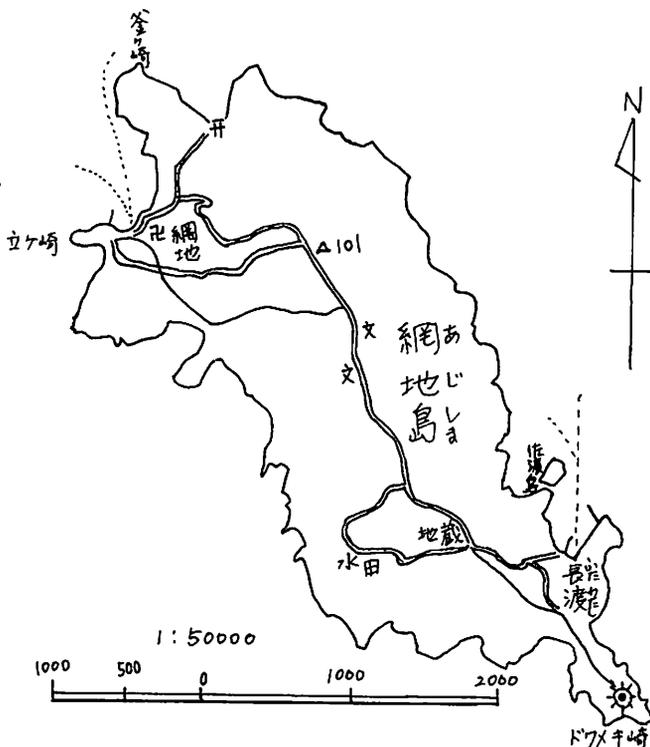
島の最高点は、学校と網地の間にあり、標高101 mである。ここを中心に東西のいくつかの深い沢が海岸に開いている。

気候は、寒暖の差が少なく明らかに海洋性気候を示している。1月中旬頃よりツバキの開花が始まり、雪が積もっても2・3月で溶けてしまう状態で大変暖かく、越冬の期間でも月平均気温が 0°C 以下になることがない。このため暖帯性植物が数多く認められている。これは、黒潮が本州太平洋岸を北上してきている影響と思われる。

網地島の北東7 kmに位置する金華山のクモについては、西川喜朗が1969年18科71種を報告しているが、網地島のクモのそれは皆無である。

筆者は1982年10月以来4回同島に渡り、採集調査を行った。その結果、16科76種を採集したので報告する。採集地は、1982年10月12日を除き、ほとんど長渡地区～ドワメキ燈台寄りの島内の南半分にかたよっている。この報告が同島のクモ調査の最終報告というわけではないが、宮城県内でも黒潮・親潮がぶつかる場所に位置する同島の調査をすることは、これからの県内のクモ相調査を進める上で意義あることと思われるので、網地島のクモ相の一知見として報告する次第である。

本報告にあたり、同定等で御指導いただいた八木沼健夫博士に深く感謝する。なお分類体系は、日本産真正蜘蛛類目録（八木沼1977）によった。リスト中の和名のあと(Nw)は、西川喜朗の金華山島のクモ目録にも報告のある種である。また、①ド、②フ等については、以下の採集月日と場所を表す。



①：1982年10月10～12日採集

②：1983年4月29・30日採集

③：1983年6月5日採集

④：1984年8月17・18日採集

ド：ドワメキ燈台周辺

フ：長渡（ふたわたし）部落

ア：網地部落

ジ：地蔵様周辺

田：長渡水田周辺

小：小学校周辺

Atypidae

ジグモ科

1. *Atypus karschi* Dönitz

ジグモ ①ド ②ド

Uloboridae

ウズグモ科

2. *Uloborus sybotides* Bös. et Str.

カタハリウズグモ ④田

3. *U. varians* Bös. et Str.

ウズグモ ②ジ

Segestriidae

エンマグモ科

4. *Ariadna insulicola* Yaginuma

シマミヤグモ ①ド ②フ

Theridiidae

ヒメグモ科

5. *Achaearanea angulithorax* (Bös. et Str.) ツリガネヒメグモ ③ジ ④田 ④ジ

6. *A. tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ ①フ ②フ ②田 ④ジ

7. *Anelosimus crassipes* (Bös. et Str.) アシプトヒメグモ(Nw)①フ ②ド ②ジ③フ④ド

8. *Ariannes cylindrogaster* Simon オメガグモ ①ド・ア ②ド ④ジ・ド

9. *Enoplognatha japonica* Bös. et Str. ヤマトコノハグモ ①ジ

10. *E. transversifoveata* (Bös. et Str.) カレハヒメグモ ②フ・田

11. *Stemmops nipponicus* Yaginuma スネグロオチバヒメグモ ①ド

12. *Theridion japonicum* Bös. et Str. ヒメグモ ④ド・田

Nesticidae

ホラヒメグモ科

13. *Nesticus brevipes* Yaginuma

コホラヒメグモ ③フ

Linyphiidae

サラグモ科

14. *Doenitzius peniculus* Oi

デーニッツサラグモ ①ド ③フ

15. *Floronia bucculenta* (Clerck) ハナサラグモ ④田

16. *Linyphia clathrata* Sundevall コウシサラグモ ②田

17. *Prolinyhia yunohamensis* (Bös. et Str.) ユノハマサラグモ(Nw) ②田

Erigonidae

コサラグモ科

18. *Oedothorax angulituberis* Oi

コトガリアカムネグモ ②田

Araneidae

コガネグモ科

19. *Acusilas coccineus* Simon

ハツリグモ ②フ

20. *Araneus macacus* Uyemura

ヤエンオニグモ ②ジ ④ジ

21. *Araneus uyemurai* Yaginuma

ヤマオニグモ(Nw) ①小 ③ジ ④ジ・ド

22. *A. ventricosus* (L. Koch)

オニグモ(Nw) ①小 ②フ・田

23. <i>A. cornutus</i> Clerck	ナカムラオニグモ	②田
24. <i>A. triguttatus</i> Fabricius	マメオニグモ	③フ
25. <i>A. ejusmodi</i> Bös. et Str.	ヌサオニグモ	③フ
26. <i>A. pentagrammicus</i> (Karsch)	アオオニグモ	①フ・ド
27. <i>A. variegatus</i> Yaginuma	ニシキオニグモ	①ド
28. <i>Neoscona doenitzi</i> (Bös. et Str.)	ドヨウオニグモ	①ジ ④田
29. <i>N. fuscocolorata</i> (Bös. et Str.)	ヤミイロオニグモ (Nw)	①ア・ジ
30. <i>N. mellotteei</i> (Simon)	ワキグロサツマノミダマン	④ド
31. <i>N. nautica</i> (L. Koch)	イエオニグモ	①フ
32. <i>N. scylla</i> (Karsch)	ヤマシロオニグモ	①ジ ②フ・ジ・田 ④ド
33. <i>N. scylloides</i> (Bös. et Str.)	サツマノミダマン (Nw)	③ジ
34. <i>Zilla astridae</i> (Strand)	サガオニグモ	②田 ③フ
35. <i>Z. sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ	①小 ②田 ④ド・田
36. <i>Argiope bruennichii</i> (Scopoli)	ナガコガネグモ	①ア・フ・ジ ②ド・ジ ④ド
37. <i>A. minuta</i> Karsch	コガタコガネグモ	①フ
38. <i>Cyclosa atrata</i> Bös. et Str.	カラスゴミグモ	④ジ・ド
39. <i>C. insulana</i> (Costa)	シマゴミグモ (Nw)	①ド
40. <i>C. japonica</i> Bös. et Str.	ヤマトゴミグモ (Nw)	④ド
41. <i>C. octotuberculata</i> Karsch	ゴミグモ	①フ ②フ ③フ ④ジ・ド
42. <i>C. sedeculata</i> Karsch	ヨツデゴミグモ	①フ ②ド・田 ③フ ④ド
43. <i>Larinia</i> [<i>Lariniaria</i>] <i>argiopiiformis</i> Bös. et Str.	コガネグモダマン	①フ・ジ ②フ・田
44. <i>Nephila clavata</i> L. Koch.	ジョロウグモ (Nw)	①フ・ア・ジ
Tetragnathidae		アンナガグモ科
45. <i>Leucauge subblanca</i> Bös. et Str.	コシロカネグモ	①フ ②フ・ジ・田 ④ジ・ド
Agelenidae		タナグモ科
46. <i>Agelena limbata</i> Thorell	クサグモ (Nw)	④田
47. <i>A. opulenta</i> L. Koch	コクサグモ	①フ
48. <i>Coelotes luctuosus</i> L. Koch	メガネヤチグモ	①小 ③フ
49. <i>C. modestus</i> Simon	ヤマヤチグモ	①フ ②田
50. <i>Cybaeus aquilonalis</i> Yaginuma	コナミハグモ	①ド
Pisauridae		キンダグモ科
51. <i>Dolomedes sulfureus</i> L. Koch	イオウイロハンシグモ (Nw)	①小・ジ ②ド・田 ④ジ
52. <i>Pisaura lama</i> Bös. et Str.	アズマキンダグモ	①ジ ②ド
Lycosidae		コモリグモ科
53. <i>Pardosa astrigera</i> L. Koch	ウヅキコモリグモ	①ド

54. <i>P. brevivulva</i> Tanaka	ヤマハリゲコモリグモ	③フ
55. <i>P. laura</i> Karsch	ハリゲコモリグモ (Nw)	②ド
56. <i>Trochosa terricola</i> (Thorell)	カラフトコモリグモ	①ド
	Oxyopidae	ササグモ科
57. <i>Oxyopes badius</i> Yaginuma	クリチャササグモ	①ジ ④ジ
	Thomisidae	カニグモ科
58. <i>Misumenops japonicus</i> (Bös. et Str.)	コハナグモ (Nw)	②フ ③フ ④ジ
59. <i>M. tricuspoidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ (Nw)	①フ・ジ ②フ・ド・ジ ③ジ
60. <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ (Nw)	②田
61. <i>Philodromus subaureolus</i> Bös. et Ste	アサヒエビグモ (Nw)	②フ
62. <i>Tibellus tenellus</i> (L. Koch)	シャコグモ (Nw)	①小 ②ド
63. <i>Tmarus rimosus</i> Paik	セマルトラフカニグモ	④ジ
64. <i>Xysticus croceus</i> Fox	ヤミイロカニグモ	③フ
	Salticidae	ハエトリグモ科
65. <i>Carrhotus xanthogramma</i> Latreille	ネコハエトリ (Nw)	②ド ④ジ
66. <i>Dendryphantas atratus</i> (Karsch)	カラスハエトリ (Nw)	②フ・ジ ④ジ
67. <i>Evarcha albaria</i> (L. Koch)	マミジロハエトリ (Nw)	①フ ②ド・田
68. <i>Hasarius doenitzi</i> Karsch	デーニッツハエトリ (Nw)	④ド
69. <i>Marpissa pulla</i> (Karsch)	ヨダンハエトリ	④田
70. <i>Menemerus(?) himeshimensis</i> (Dön. et Str.)	イソハエトリ	②岩場海岸
71. <i>Plexippus(?) annulipedis</i> Saito	マダラスジハエトリ	②田
72. <i>Silerella vittata</i> (Karsch)	アオオビハエトリ	①小
	Clubionidae	フクログモ科
73. <i>Chiracanthium japonicum</i> Bös. et Str.	カバキコマチグモ	①フ ②フ
74. <i>C. lascivum</i> Karsch	ヤマトコマチグモ	③フ
75. <i>Clubiona jucunda</i> (Karsch)	ヤハズフクログモ (Nw)	②ジ ③フ
76. <i>Itatsina praticola</i> (Bös. et Str.)	イタチグモ (Nw)	①ド

以上、網地島のクモ、16科76種を報告する。これは、西川喜朗の報告した金華山のクモリストと23種について共通しているが、まだ未採集の種が多いものと思われる。

今後も徐々に調査を進め同島のクモ相を明らかにしていきたい。

参考文献

- 1) 八木沼健夫 (1960) : 原色日本蜘蛛類大図鑑、保育社
- 2) 西川喜朗 (1969) : 金華山島のクモ、ATYPUS (49/50), 53—60
- 3) 高橋和吉 (1972) : 網地島植物誌、著者自刊

- 4) 八木沼健夫 (1977) : 日本産真正蜘蛛類目録 (1977 年改訂) *Acta Arachnologica* (27), 367-406
- 5) Ryoji Oi (1960) : Linyphiid Spiders of Japan. *J. Inst. Polytech. Osaka City Univ. (D)* 11:137-244. pls. 1-26
- 6) 松本誠治・新海栄一・小野展嗣 (1976) : 学研の図鑑・クモ、学研

神奈川県下のスズミグモの記録 2 例

平塚市博物館

浜口 哲一



図1 スズミグモの発見地点
(A: 小田原市曾我山、
B: 山北町尺里)

スズミグモ *Cyrtophora moluccensis* (Doleschall) は、周知の通り、大型のドーム網を張る美しいクモで、静岡県大井川を東限として、西日本の太平洋岸に広く分布している (新海・高野 1984)。筆者は 1984 年夏に、従来言われていた分布域よりも東にあたる、神奈川県下の 2 ケ所で本種を観察する機会があったので、分布記録として発表しておきたい。

例 1. 小田原市曾我山 (図 1 の A 地点) 1984 年 7 月 20 日 ♀ 幼体 1 個体

曾我山は国鉄御殿場線の東側に連なる丘陵で、スズミグモを発見したのは、東海道新幹線の弁天山トンネルの上にあたる、標高約 100 m の地点であった。付近は西南向きの斜面で、一面のミカン畑となっている。スズミグモの網は、ミカン畑の境の背の低い生け垣に作られており、ドームの直径は約 3.5 cm であった。この個体は体長 9% の未成熟な ♀ で、標本として、平塚市博物館に保存してある。

例2. 山北町尺里(ひさり)(図1のB地点)1984年8月30日 ♀成体1個体

2回目の発見は、山北町尺里から高松山に登る登山道沿いの、標高約200mの地点であった。付近は例1と同じくミカン畑で、網は畑の脇のサワラの木立ちの間のやや暗い空間に作られていた。この個体は体長約25%の成熟した♀で、ドームの直径は約50cmあり、ドームの上部に、巾20%、長さ50%の卵のうがつけられていた。スズミグモの網の下部と接して、ジョロウグモ数匹の網があり、両種の糸が錯綜して空間を占めていた。この個体は腹部の斑紋が、白と黒の円錐状突起を除いては不明瞭で、全体がオレンジ色がかった色周であった。また第4歩脚は赤みがなく、ほとんど黒く見えた。なお、この個体は採集せずに、写真凡録だけに留めておいた。

新海栄一氏によると、現在までの神奈川県下のスズミグモの凡録は、横浜市港南区野庭町の1例(谷川他1982)があるのみだと言う。今回の筆者の凡録も、偶然の漂着によるものか、あるいは分布の北上傾向の現われであるのかは何とも言えないが、離れた地点で2例が同時に凡録されたこと、1例は卵のうを持っていたことを考えると、後者の可能性が強いのではないかと思う。静岡県東部や神奈川県で観察されている方の注目をお願いしたい。最後にこの小文を書くにあたって御指導頂いた新海栄一氏に感謝いたします。

文献：新海栄一・高野伸二1984：「フィールド図鑑 クモ」東海大出版会 p90

谷川・飯島・上野・森1982：神奈川県立野庭高等学校周辺の真正蜘蛛類、Kishidaia (48)：23-29

アシダカグモ *Heteropoda venatoria* (LINNE) の
長期飼育報告 (V)

萱 嶋 泉

7年目(昭和50年5月1日~昭和51年4月30日)

昨年度の4月27日に与えたクロゴキブリを今年度の5月1日午後8時になって捕え、ゆっくりと食べはじめた、定刻の観察時間の夜中の0時には、まだ捕食中であつたので、夜明けまで観察をつづけた午前4時50分になった時、硬いボール状の食べかすを、ぽとんと落したそれで食事に用いた時間は8時間50分であつた。このアシダカグモの雌は、今年度に入って元気なので5月2日午前7時にクロゴキブリを1匹与えてみた。すると直ちにこれを捕えて食べはじめた。その日の定刻観察時刻の正午に飼育箱を覗くと、まだ盛んに食べていたので、ひきつづき観察をつづけると、午後4時15分頃に食べかすを落した。食べかすは硬くかためられていたが、クロゴキブリの後脚が2本ともそのままの形で残っていた。食事に要した時間は9時間と15分であつた。この雌のアシダカグモは昼間でも飼育箱の中を歩き回るので、交尾用の箱に昨年使用した雄と一緒に入れてみたのである。しかしまだお互いに求愛行動を示めていないもの同志であつたため、その箱の相対する側面に、わかれて静止し、全くお互を意識しないでいた。夜中の定刻観察時にも動きを認めなかつた。翌朝(5月3日)7時の観察時にも雌雄とも、依然として動かずに静止していた。ところが正午の観察時に雄の右側の第1・第3歩脚が切断されていた。そのために雄は箱の隅に歩脚を縮めてうずまっていた。多分これは雌の仕業であると思つたので、雄を元の箱に戻してやった。雌にはクロゴキブリを1匹与えた、このクロゴキブリを5月5日午後8時30分になって捕え食べはじめた。この餌を5月6日午前6時40分になって食べかすをボール状の塊りにして捨てた、食時に要した時間は10時間と10分であつた。雌の動きが活発であるので、5月6日午後7時に生後4年目の雄を雌の箱に入れた。この雄は神奈川県茅ヶ崎市で採集した雌グモから生れたものである。この雄は自分の箱で精網をはっていたので、ひょっとするとこの雄の生殖球には、既に精液が入っているかもしれないのである。ところが5月7日午前7時の定刻観察に雄が天井の隅に精網をつくっているのに気付いた。この箱には朝日が当たっているのに、それにはかまわず雌はこの精網を誇ぐようにして、少量の精液を落した。これに朝日があたって、キラキラ光って、美しい玉のように見えた。その液を右の触肢を伸ばして、精液を栓子を通して生殖球に吸い込んだ。しばらくして左の触肢を伸ばして、丁寧に精液を生殖球に吸い込んだのである。この動作を雄がしている間、雌は箱の床にいて、しきりに雄の動きを見ていた。5月7日午後8時になると、雄は雌のいる床に下りてきた。雌ははっきりと雄を意識して、第1歩脚を前方に伸ばし、ゆっくりと後退した。左右の触肢の生殖球に精液を吸い込んだ雌は、腰高の姿勢で雌に接近し、箱の隅に雌を追いこんで側面にたたせる格好にして、先ず左の触肢の栓子を雌の生殖口に挿入した。そうして血のうを膨張させて精液を注入した。今回交接に使用した雄の血のうは大きく、内眼ではっきり膨張したり、縮んだり

する有様が見えた。これに約10分時間がかかったが、右の触肢の栓子を挿入しようと雄が雌を押えかけたが、雌は嫌って箱の天井に逃げてしまった、雄はそれ以後は雌に近づかなかった。1時間ばかりして、雄は第1・第2の歩脚を伸縮しはじめた。そうして体を浮かせ第1歩脚をぴんと高くかかげて雌に接近していった。雄が近づくると雌は、すばやく逃げてしまった。それでとうとう右の触肢の生殖球の精液は私の見ている間には、雌に渡すことが出来なかった。翌朝5月8日の定刻観察時の7時に、雌が雄をさかんに追い回しているのを見た。私は5年目の時にみた様子に似ているので驚いた。それは5年目の時は雌が雄を追い回して遂に捕殺したからである。これは大変だと思って、すぐに雌と雄をそれぞれの飼育箱に戻してやった。元の飼育箱に戻った雌は落ちついて側面に歩脚を広げ下を向いて静止した。5月9日午後7時にクロゴキブリを1匹与えた。それを3日後の5月12日になって、10時間以上(約10時間15分)かけて食べた。食べかすは塊状の硬いものであった。

その後5月13日と18日の両日にクロゴキブリを1匹ずつ捕食したが、いずれも10時以上の長い食事所要時間であった。5月21日の午前7時の定刻観察時に、飼育箱の側面に直径23mmの白い円板状の産座をつくっているのに気付いた。雌グモはこの産座を跨ぐようにして何べんか確かめる動作をしていたが、その中にどろどろと薄黄色の卵を産座に産みつけた。卵がかたまらない中に腹部で押さえ産座に平らにはりつけた。これに白い糸を丁寧にかけて、前年と同じように平扁な卵のうを約1時35分かけて作りあげた。側面にはりつけられた卵のうを、すこしずつはがして、雌グモが触肢と第3歩脚で、しっかりと抱えこんだのは、同日の午前9時近くであった。この雌グモは前年同様に卵の 化するまでの45日間は絶食をした。その為め雌グモの腹部は萎縮し、しわだらけになった。

7月5日朝7時にはクモは抱えるのを止め、卵のうを箱の側面に付着させ、自分は天井でこれを見守っていた。午後7時の観察時に卵に1匹の子グモが歩いているのを見た。つづけて観察していると、また1匹出てきた、その中に卵のうの上蓋と下蓋のつぎめから、ぞろぞろと出てきて、見るまに、飼育箱一杯に広がった。しかし子グモ達は歩き回らず、じいっとしていた。この時に子グモの数をかぞえた。しかし7月6日の午後5時頃から子グモが動きはじめた。母グモは歩脚を縮め天井の隅にうづくまっていた。その格好は、なるべく子グモの邪魔にならないようにしているように思えた。7月7日の朝7時にこの子グモの箱を今まで同じように2階のベランダに持って行って、蓋を開けた、子グモは思い思いに箱の上縁りから糸を風に流して、すいすいと分散していった。最後の1匹が旅び立つまで、わずかに5分間であった。母グモはその間、床にうづくまり少しも動かなかった。子グモの数は98匹であった。

7月8日に雌グモに1匹のクロゴキブリを与えたが、このゴキブリの成虫を捕える力がなかった。かえってゴキブリのために雌グモがけちらされる場面もあったので、すぐゴキブリを取り除いて、体長20mmのクロゴキブリの幼虫を与えてやった。この餌は7月9日午後8時頃に捕食した。午前0時の定刻観察時には食べ終えて、食べかすを硬い塊りにして落してあった。それで新たに前回と同様の幼虫を与えてみると7月11日の午後5時に盛んに餌を追いかけているのを見た。つづけて観察していると午後6時10分にこれを捕え食べはじめた。幼虫は食べやすいのか午後10時30

分に食べかすをボール状にして床に落した。クロゴキブリの幼虫を2度共4時間余りで食べつくしたのである。それで7月12日からは2日おきにクロゴキブリの幼虫を1匹与えることにした。今年度はこの雌グモは7月の半をすぎても、8月になっても、第2回目の産卵をしなかった。クロゴキブリの幼虫はよく食べてくれるので、昨年よりは元気で、飼育箱の中をよく動いたが、体全体の艶がわるく、腹部のしわもめだってきた。動かずに占座する場合も箱の上部よりは下部や床が多くなった。この様な格好を見ていると、これがクモの老衰の姿かなと思えるのである。また歩脚と触肢を口の所にもって行って1本づつ丁寧に口でぬぐいつつきれいにする、所謂クモの化粧の様子が少くなり、潑刺とした動きも姿を消してきた。クモにとって7年という歳月は、かなり長いものであることがわかった。しかしこの雌は11月16日までは、きちんと2日おきに与えられるクロゴキブリの幼虫を食べたのであった。11月16日以降は食欲がなく、箱の側面の下部に歩脚を広げて下を向いて占座するだけになった。それに夜間の温度も10℃を下まわるようになってきたので、発泡スチロールの板で飼育箱をかこい越冬させることにした。10日に1ぺん噴霧器で霧をかけ、クロゴキブリの幼虫を与えた。けれども翌年3月15日に発泡スチロール板をはずし越冬仕度をとくまで絶食をつづけたのである。3月15日からは室温を15℃より下がらないように、ストーブをつけたり消したりして温度調節に気をくばって飼育をした。この3月15日にクロゴキブリの幼虫を与えると、ただちに捕えた、それを8時間余りかけて食べ、硬い食かすの塊りにして落した。それで3日おきにクロゴキブリの幼虫を与えて、今年度の終りの4月30日まで飼育した。7年目のこのクモは1回交尾し、1回産卵をした。餌は7月8日以降幼虫を与えることにした。このクロゴキブリの幼虫はよく食べてくれ、栄養となるものは完全に近いまでに食べたように思った。それは何時も硬い塊状に食かすをしたことで、よく理解できた。さらにこのアシダカグモの老衰が次第にはっきりしてきた。前年よりよく食べたのに、運動の量と腹部のふくれ具合は、はっきりと前年より劣ってきた。化粧の回数も減少が目立ってきた。しかし今年度このクモから98匹の子グモが誕生したことは、大きい収穫であった。

ヤマオニグモ *Araneus uyemurai* (?)

にみられた網の更新の一例観察

新海 明 (国立音大附属音楽高等学校)

円網を張るクモの網の更新については多くの研究者によって経験的に知られている (Foelix, 1982)。すなわち、円網を張るクモの多くは、夕刻になると網を噛み切りながら全面的に壊し、その際にワク糸やその一部のみが残され、次の造網の時に使われるというものである。

しかし、円網の更新は全面的に行なわれるばかりではない。たとえば、ジョロウグモ *Nephila clavata* やオオジョロウグモ *N. maculata* などの中令以上の個体の網では $1/3 \sim 2/3$ 程度の部分が交互に張り替えられる (Robinson & Robinson, 1973. 新海, 1981. 千国 1982) また、餌の捕獲時に損傷した場合などのような部分的な補修も知られている。たとえば、ジョロウグモにみられるような穴のあいた箇所を数本の糸でかがただけの簡単なものから、スズミグモ *Cyrtophora moluccensis* のように一見すると損傷した部分がどこかわからなくなってしまうほど精密に補修するもの (新海, 未発表)、さらにウズグモ科の一種 *Uloborus diversus* にみられるような網の $1/3 \sim 1/2$ を全く新しく張り替えてしまうものも知られている (Eberhard, 1972)。

以上述べてきた補修を含む網の張り替えは①ほぼ全面的に張り替えられるものか、②網の $1/3 \sim 2/3$ を張り替えるもの、③網の一部分を糸でかがるのみの補修、であった。しかし、筆者はこれらのタイプとは全く異なる網の張り替えをヤマオニグモ *Araneus uyemurai* とと思われる網において1例だけ観察した。すなわち、元の網のヨコ糸を周辺に寄せて網の中央を開け、その中に網を張ったのである。筆者の知る限りではこのような網の張り替えは、現在まで全く報告されていない。そこで、ここでは円網中に円網を張る形で行なわれる網の張り替えについて報じ記録にとどめることにする。

観察は1983年9月17日に千葉県天津小湊町にある東大千葉演習林内の落葉広葉樹の繁る猪の川林道C-29にて行なった。ヤマオニグモ(?)は前日より張っていた網を壊しはじめていた。その行動が普通の破網過程と異っていたので記録をとった。

観察は、網の破壊・造網の過程のすべてであるが、特にタテ糸の破壊及び造網法・こしきの張り方・完成前後のタテ糸・ヨコ糸数(ヨコ糸数は網の左45°下方を測った)・完成後の網のタテ径とヨコ径(cm)・新しく張られた部分のタテ径とヨコ径・古い網における餌の捕獲痕跡などを中心に行なった。破網は17時10分より始まり17時33分に新しい網が完成した。

なお、網の図は夕刻のため写真撮影ができなかったので観察記録をもとに筆者が模式的に描いたものである。また、観察したこのクモはヤマオニグモと思われるが採集していないので一応ここではヤマオニグモ *Araneus uyemurai* (?)としておく。

観察をはじめた時(17:10)には、ヤマオニグモ(?)はすでに網の中心部を壊しはじめていた。しかしながら、この破壊は同時に再造網の過程でもあった。すなわち、クモはこしきに位置し、free zone(空間)のタテ糸1本を噛み切り、前脚でこのタテ糸を持ったまま、糸疣より糸を引き出しタテ糸をワク方向へ下るのである。この時にクモは前方の古いタテ糸と後方の新しいタテ糸との間で *alive bridge* になっていた。また、この時、普通のクモのタテ糸張り行動にみられるように、前方のタテ糸が巻き上げられるということはなく、クモは前方にあるタテ糸の張力によってひかれていくような感があった。

クモの前方にある多数のヨコ糸はタテ糸にそのままの状態では付着しているので網はクモがタテ糸を下る部分より隙間を生じゆがんだような状態となる(図1-a, b)。このようにしてタテ糸をワク方向に15~20 cm進むと止まり、そこで180度回転して頭胸部を中心へと向ける。そして、ワク方向のタテ糸にこしきから引いてきた糸(この糸は、新しいタテ糸を引くための *guide line* となる)を付着し、今度は前方のタテ糸を噛み切り、それを前脚でたぐり寄せながら後方の糸より糸を引き出し、こしきへ戻る。この際に引かれた糸が新しい網のタテ糸になる。つまり、このタテ糸張りの過程は新海(1982)のタテ糸張りの分類における図6-aに相当するわけである。これは同時にヤマオニグモの通常のタテ糸の張り方でもある。

このようにしてクモは次々にタテ糸を張り直したが、H. PETERS(1939)が言うように普通の円網を張るクモにおいてみられるような、タテ糸が対称的な位置に交互に張られるか否かは記録をとっていなかったのもので不明であった。

こしき糸の作成過程は普通の円網を張るクモのそれと同様であり、こしき糸とタテ糸は同時進行でつくられた。そしてタテ糸を15本引いたところで足場糸に移行し、古い網に達したところで足場糸の作成をやめヨコ糸を張りはじめた(図1-c)。ヨコ糸の作成過程も通常の円網を張るクモと同様であった。

このようにして完成した網は、中心にある新しい網の部分と外周にある古い網の部分から成り立っていた(図1-d)。中心にある新しい網はタテ糸15本、ヨコ糸31本から成り、外周にある古い網はタテ糸22本、ヨコ糸30本からできていた。つまり、完成後の網は中心より2/3くらい離れた所に円形の不連続線をもつことになり、ここで中心と外周のタテ糸の数に違いがみられた。また、ヨコ糸は合計で61本持つことになった。完成後の網の大きさはタテ径×ヨコ径=48×33 cmで、中心部につくられた新しい網の大きさはタテ径×ヨコ径=30×22 cmであった。また、内ワク(Y-structure)の一部が切れられワク糸が拡大された跡がみられた(図1-dのp点)。

古い網上の餌の捕獲痕跡も調べたが2ヶ所に鱗粉が付着していただけで餌を捕獲した形跡は認められなかった。

円網の更新は一般に夕方にそれまで張られていた網をワク糸の一部だけを残してすべて撤去し、その後全面的に張り直すのが普通である。一方、ジョロウグモ属の中令以上の個体にみられるように網の半分くらいを毎晩交互に張り替えるものや、ウズグモ属のように網の修繕の際にやはり半分くらいを新たに張り直すものなどのように、全面的な網の張り替えでなく、網の一部のみを張り替

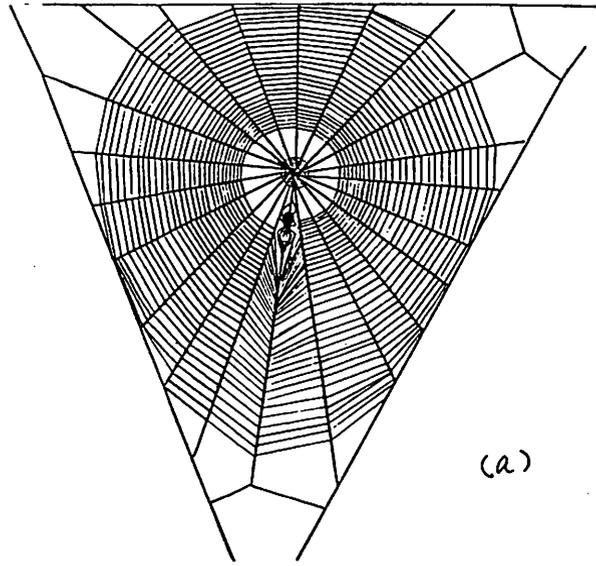
えるクモなども知られていた。ここに報告したヤマオニグモ(?)の網の張り替えも表面的にみる限り全面的なものではなく、部分的な更新の一種とみなせよう。しかしながら、ジョロウグモ属やウズグモ属の更新がタテ糸に沿った(タテ糸に平行の)ものであるのに対してヤマオニグモ(?)のそれはタテ糸に対して直交方向のものであった。つまり、ヤマオニグモ(?)の場合は元の網の中心部を破壊して外側に網を押し拡げ、その結果できた空間に新たな円網を張り替えたわけである。このようなタイプの張り替えは筆者の知る限りでは現在まで全く報告されていない。今回報告した網の更新はたった1例だけのものであるので、このような網の張り替えが円網を張るクモの中でどれほど普遍的に見られるかは不明である。筆者の経験からいうと円網を張るクモの中には、ここで報告した張り替えに似た網の更新をするクモが時々いる。ほとんどの場合は円網の下部が古い網のまま残されており、その上部が新しく張り替えられるため完成された円網は新しい網に古い網が継ぎ足された形となる。つまり、ここでは述べたヤマオニグモ(?)の網の更新もこのような円網の張り替えの変形とみなされるかも知れない。すなわち、古い円網を下部だけ残すはずのものが、上下左右すべての方向に残した結果がここに報じたようなものとなったのかも知れない。

今後は、このような網の更新例が円網を張るクモの中でどれほど見られるのか、またそのような張り替えがどのような条件で生ずるのかなど観察例を増やす必要があろう。

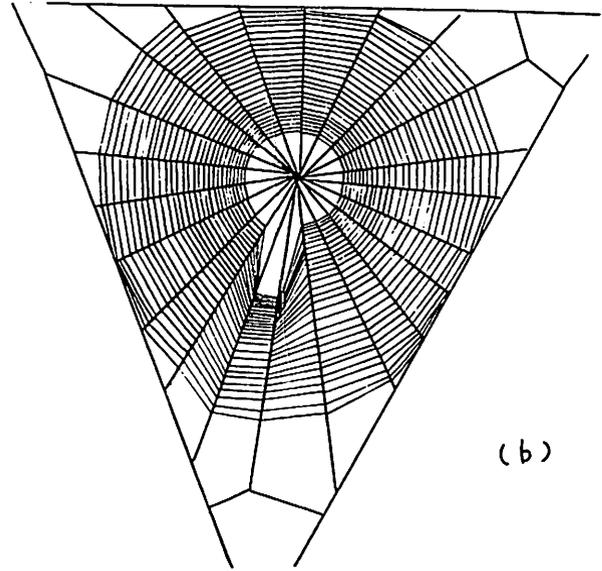
引用文献

- 千国安之輔 1982. クモたちの狩り(上) 1-79, 偕成社
- EBERHARD, W. G., 1972. The web of *Uloborus diversus* (Araneae: Uloboridae). *J. zool. London.* 166: 417-465.
- FOELIX, R. F., 1982. Biology of spiders. 1-306, Harvard Univ., Cambr., Massachusetts, and Lond., England.
- * PETERS, H., 1939. Über das Kreuzspinnennetz und seine Probleme. *Naturwissenschaften* 47: 777.
- ROBINSON, M. H. & B. ROBINSON, 1973. Ecology and behavior of the giant wood spider *Nephila maculata* (FABRIUS) in New Guinea. *Smithson. contrib. zool.*, 149: 1-76.
- 新海 明, 1981. ジョロウグモの網の更新と足場糸の意味、東亜蜘蛛学会第13回大会講演要旨. *Atypus*, 79: 22.
- , 1982. ジョロウグモの網の構造の再検討(1). *Atypus*, 80: 1-10

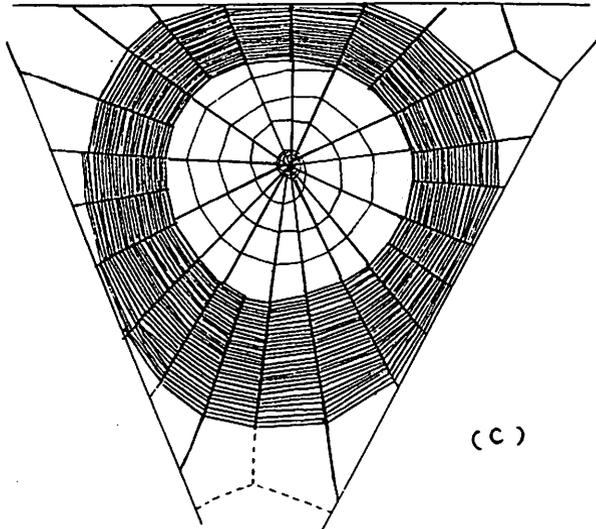
* 印は直接参照していない。



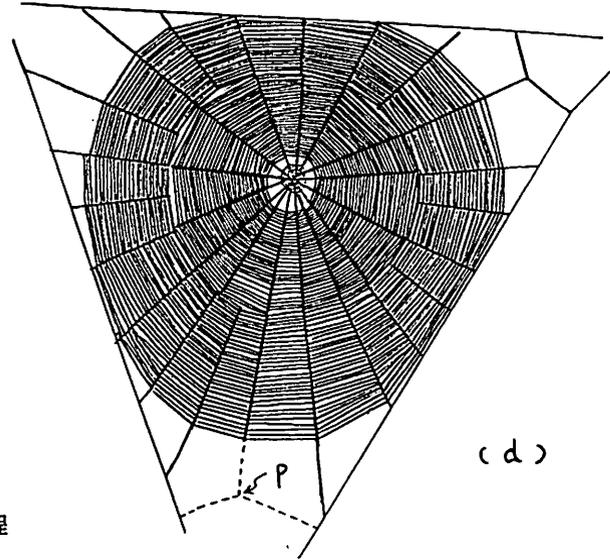
(a)



(b)



(c)



(d)

図1 ヤマオニグモ(?)の網の更新の過程

KISHIDAIA 投稿規定

1. 投稿資格は本会会員とする。ただし、共著者には会員以外の者を含むことができる。依頼原稿については、本会会員でなくとも、運営委員会の承認があればよい。
2. 原稿内容は、クモや東京蜘蛛談話会についての解説、記録、記行文、感想などとし、投稿原稿に対して加筆、削除、修正などをお願いすることがある。動物分類命名規約に呈色することは除く。
3. 頁数は図表を含めて刷上り6頁以内とし、超過分は著者全額負担となる。(現状、1頁につき2,000円とするが、印刷費の変更等により、金額が変わることがある)
4. 図、写真は原寸大を原則とし、拡大、縮小のある場合は、全額著者負担とする。
5. 別刷は原稿の1頁目の上部に、別刷の必要枚数および表紙の有無を赤字で記入する。(別刷の金額は、全額著者負担とする)

原稿作成上の注意

1. 原稿用紙は、44字×18行か44字×36行の横書き用紙をできるだけ使用して下さい。
(事務局にて44字×18行の原稿用紙が用意してあります。尚、KISHIDAIAは、44字×35行で1頁となります。)
2. 学名などイタリック体を使用する場合には、その下に赤線を引いて下さい。(学名の場合、属名と種名、それぞれに赤線を引いて下さい。)
3. 写真は白黒にして下さい。図は製図用インクなどにて、墨入れして下さい。
4. 文章は(44字原稿用紙使用)5行目からかきはじめて、1行目にはタイトルと3行目に著者名をかき入れて下さい。

KISHIDAIA №53 1985年5月31日印刷 編集者 嶋田 順一

1985年6月1日発行 発行者 萱嶋 泉

発行者 東京蜘蛛談話会

〒191 東京都日野市多摩平7-15-9 萱嶋 泉 方

印刷所 イチカワ印刷所

〒357 埼玉県飯能市新町24-7
